

社会学

基礎科目 / 4 単位 / T 授業

担当教員 山本 順之

■使用テキスト

井上俊・大村英昭(編著)
『改訂版 社会学入門』一般財団法人放送大学教育振興会 1993

◆参考テキスト

社会福祉士養成講座編集委員会(編)
『新・社会福祉士養成講座第3巻 社会理論と社会システム第3版』中央法規出版 2014

講義概要・一般目標

「社会学」は人間の社会的行動（社会生活）に潜む一定の規則性（社会関係、社会秩序など）とその因果関係を体系的に研究するものです。社会福祉の領域に対して社会への視座と社会問題を考えるための方法を提示します。本講義を通して社会学という分野の見方・考え方を知り、みなさんの個人的行動・事象を社会（ミクロにもマクロにも）と結びつけて解釈し理解する楽しみを身につけてください。教科書の「4章システムと生活世界」は内容が高度で独習では難しいと判断し、添削と単位認定試験の範囲から外しました。興味のある方は参考テキストをよく読んで挑戦していただくと幸いです。

添削と単位認定試験には、客観問題のほかに記述式問題を課しました。高等教育がレジャーランド化して久しくなりましたが、やはり大学卒の人間は日本語がきちんと書けなければなりません。以前、暗記だけの客観問題は年長者にはきついな（自分もそうです！）と思って記述式問題を加えたら、ほとんど文章になっていないか、問題の意図を無視して自分の経験だけを書いている答案が散見されました。多少採点基準を緩めるつもりで出題しても、かえって難しくなったようでした。この傾向は最近の国立大学でもよく見られます。これではいけません。少なくとも職場で使って恥ずかしくない程度の日本語が書けるように（私自身も論文や報告書程度のものしか作成できませんが・・・）がんばりましょう。

到達目標

- (1) 人間形成のメカニズムとプロセスが理解できる。
- (2) 人間の社会的行動を社会学的視座から理解できる。
- (3) 自分自身の考え方で社会を読み解くこと＝主体性を志向する。

評価方法

科目単位認定試験により評価。

学習指導

第1章 社会の中の人間

社会学の前提

この節のポイント

ふだん（家族を含めて）自分自身は個人的に生きていると考えているが、いざ何か困ったことが起きたとたん、社会とのつながりを思い知らされることになる。人間は好むと好まざるにかかわらず、社会に依存し、社会から直接間接の影響を受ける存在なのです。

「自分」の発生

この節のポイント

自分に関する一定のイメージや「自己意識」は大体20歳前後に出来上がるといわれています。「自分」というものがどんな過程を経て形成されるのか、20世紀初頭米国の研究者の話をもとに考えてみましょう。

社会的知覚

この節のポイント

自己イメージや自己意識はなるほど時間をかけて社会的に形成されることはわかったが、物体の大きさや運動に関するごく単純な知覚的判断において本当に社会的影響を受けるものなのか？いくつかの実験を通して考えてみます。私は過大視について自分の子どもで試してみたら、まあまあ結果でした。

社会による型どり

この節のポイント

所属社会の文化（とくに価値と規範）を（まずは）子ども時代に内面化（忘れられなくなる！）することを社会学や文化人類学では「社会化」と呼びます。実は「男らしさ・女らしさ」などの基準も所属社会や時代によって異なるのです。神様の言うとおり、というわけにはいきません。

第2章 集団と個人

共同体と機能集団

この節のポイント

社会集団に関する設問は、未だに公務員試験でみかけます。テキストに基づいて、共同体と機能集団を対比するような表を作るとよくわかります。集団は個人が社会化される場なのです。

未分化と分化

この節のポイント

母子未分化状態に代表される（母なる）共同体を下支えているのが、集合意識と呼ばれる感情融合です。

欲望＝模倣の世界

この節のポイント

田舎の人間は一見やさしそうに見えますが、一皮むくと出る杭を打つような厭らしいところがあります。都会の人のなかには、これを知らずに田舎へ引っ越したいと望んでおられる方がいるようですが、田舎育ちの私には理解できません。そんなしょうもなくってちょっと怖い側面が（田舎の生活に代表される）共同体には存在するのです。この見方は比較的新しく面白いですね。ただし、この考え方を提唱したR. ジラールの文学社会学はヨーロッパ系（とくにフランス）の小説をかなり読み込んでないとよくわからないので、困りものです。高校の現国で習った『こころ』を思い出していただけると、いいかも知れません。

集団参加の諸相

この節のポイント

普段から白衣を着用する医学部医学科新1年生や支給された聴診器を振り回す3年生等を見ると笑えますが、これはやがて所属するはず(?)の集団(非準拠集団)にあらかじめ適応してしまう現象で、予期的社会化と呼びます。こんなちょっとした日常の光景を社会学の目で見て(理屈っぽく)説明するのが、社会学者です。

第3章 文化と価値

言語による世界構築

この節のポイント

ダニの話から始めるところがとてもユニークです。人間は象徴記号である「言語」を使うことによって、想像力と創意に満ちたこの世界をつくりました。なぜ「ことば」なのか？その理由が言語学の視点から説明されています。余裕のある方は、ソシュール『一般言語学講義』（東大出版会）を読んでみて下さい。

意味秩序と文化的拘束

この節のポイント

生理的早産説（調べてみて）や動物生態学によると、人間における「本能のこわれ」が文化の創造と教育可能性を授けてくれました。しかし、一方ではこの本能のこわれがヒトの世界だけに見られる狂いや不確実性（残虐な種内闘争と無尽蔵な性欲）をもたらしました。

文化と価値

この節のポイント

文化とは何か立派なこと（清武文化会館？）ではなくて、世界中のあちこちで異なる「生活様式」のことです。でも、ちょっと考えるとおかしいところがあります。食文化でいえば、私たちが欲するのはエネルギー摂取だけのために食べたいのではなく、おいしくかつ綺麗に食べたいのであり、さらに宗教的に食べてはいけないなどと、勝手なタブーを作ります。性欲の発散にしてもインセストタブーやホモセクシュアル・レズビアン禁止・忌避によって、家族内の異性や同性を欲望することはできません。「食べる」「交わる」ということに対して、どうしてこんなに手かせ足かせを嵌めたがるのでしょうか？

第5章 自殺と社会

社会学と自殺

この節のポイント

社会学の起源は仏革命後のコントやサンシモンまで遡れますが、現代社会学の生みの親と言えば、やはり19世紀末から20世紀初頭のフロイト（心理学・精神医学）、ウェーバー（ドイツ）とデュルケム（フランス）です。とりわけデュルケムは社会学を一つの個別科学として確立するために『自殺論』（1897年）を著しました。社会学の対象である「社会」とは個々人の意識には還元しえない独自の实在であり、これを集合意識と名付けました。そして自殺を促すような集合意識のあり方を分析したのです。

統計データの分析

この節のポイント

デュルケムは社会学の方法として実証主義（データに基づく分析）を唱え、各国の自殺率に表れた傾向を（背後にある）集合意識の視点から読み解きました。その結果、集団のまとまり具合が悪くなると人は不安に陥り、その結果自殺しやすくなることがわかりました。この集団の持つ凝集力を、ある人を取り巻く（リアルな）ネットワークと言い換えれば、現在でも通用しますね。

自殺と集合意識

この節のポイント

デュルケムは統計データから自殺類型を提示し、近代化ないし世俗化によって自己本位型とアノミー型の自殺が増加していることを示しました。なお彼は、個人は实在している社会によってつくられると断言しています。

第6章 宗教と資本主義

この章のポイント（節ごとに説明したいが、紙数に制約があるらしいので、以下は章ごとにします）

M. ウェーバー『プロ倫』（1904-05年：業界ではこんな呼び方が）を中心に個人と社会の関係を考えます。マルクスは下部構造（経済を中心とする利害状況、難しく言えば生産関係）が上部構造（文化を構成する理念）を規定し、この生産関係の変動が歴史を動かすと述べました。これに対して、ウェーバーは一般的にはそうかもしれないが、なかには理念自体（例えば特定の宗派の教え）が方向修正をして歴史の変動を規定することもあると考えました。

第7章 自由からの逃走

この章のポイント

E. フロム『自由からの逃走』（1941年）を取り上げ、ナチズムの勃興と熱狂的支持の原因を人間的基盤（社会的性格）という視点から探ります。上ばかり見ている「ヒラメ教師」や弱者に強くあたり上司にはヘコヘコする公務員などは、ヒトラーのようなカリスマにからめ捕られてしまう恐れがあるでしょう。

第8章 潜在的機能と予言の自己実現

この章のポイント

6章・7章でいわれた「意図せざる結果」の問題を、現代的な視角（R. K. マートンの潜在的機能）から論じます。4分類される機能概念を図に整理して、それぞれにあった事例を見つけて説明しましょう。私は医学部にいるので、この分類を「薬の開発」がらみで解説します。とくに心臓病患者が飲んだらすぐに死ぬというあの菱形青錠剤開発話は潜在的順機能のケースとして笑ってもらえます。

第9章 場面と対面

この章のポイント

多くの人が集まって「社会」生活を送っています。この社会生活が成立するためには、ある種の秩序が必要です。これは何を意味するのか、またどうやってその秩序が維持されるのか、逆にどんな時に壊れるのか？ここでは、E. ゴフマンのミクロ社会学を中心に、日常的で比較的よく知っている人との交わりから、この秩序維持と崩壊について考えてみましょう。

第10章 変容する家族

この章のポイント

一昔前の家族社会学の教科書（米国版）は家族概念から始まり、家族の起源、核家族説、家族の分類、ライフサイクル、役割・勢力構造、家族機能とその変化などへと、オーソドックスに進んでいくので安心します。ところが90年代以降に出た教科書の目次をみると、何と離婚から始まり、家族の解体、家族の病理、家族の再生、性役割の新たな変化など、全く別の世界になりました。読んでみましたが、途中で嫌になり半分くらいで放り出しました。この章はそういう米国の影響を少し感じさせるところがあります。ただし、近代家族説などは考え方としてとても重要だと思います。

第11章 都市の人間関係

この章のポイント

第9章の日常的相互作用はお互いに知り合っている人々を前提にしました。これに対して、本章では「見知らぬ人同士」の相互作用（ちょっとした目配せや無視することも含めて）を取り上げます。私は田舎者ですから、東京の生活などあまり想像できません。それでも、都会人がみだりに他人に関与すべきではないという「不関与規範」を守るためにお互いに関与し、その点で互いに協力し合っている・・・この部分には感動しました。やはり都会の人は違う？

第12章 階層移動と学歴

この章のポイント

30年ほど前でしたか、「もはや学歴社会は古い！これからは実力社会だ。だから大学より専門学校に行こう」という宣伝文句がマスメディアによく出ていました。実際にソニーでは新規採用において従来の指定校制をやめてオープン採用に切り替えました。何か急に日本が学歴社会でなくなったような気がしたものです。しかし、採用後の結果は指定校制だった前年とほぼ変わらなかったという話を聞いて、やっぱり、、、と思いました。本来、身分や門地で選ぶ属性主義的な選抜より学歴という業績主義で選ばれるほうが、よほど合理的で平等なはずですが、それなのにどうして学歴社会が批判されるのでしょうか？本章ではこの問題を「文化資本」と「トーナメント移動」という視点から考えてみます。

第13章 逸脱と社会変動

この章のポイント

自分は規範から外れた望ましくない行動や態度をとったことがない、と言い切れる人はいないでしょう。私たちは常に逸脱行動の誘惑に晒されています。それでも普通は何とか規範の枠内で暮らしております。それはどうしてですか。逆に米国ではなぜ犯罪が突出して多いのでしょうか。本章ではこの問題をマートンのアノミー論から考えます。

第 14 章 社会病理現象

この章のポイント

子ども問題を中心に、従来の精神医学や逸脱行動論では説明できなかったコミュニケーションや学校教育の病理そして非行問題などを、反精神医学の立場やラベリング論の視点で考えていきます。医原病や医療化にも関係がありそうです。

第 15 章 社会調査

この章のポイント

わずか 14 ページで社会調査の技法を説明することは不可能です。本章ではかわりに社会調査を行う際に心得るべき事項（質問に関するもの）とデータによる現実の切り取り方の問題、データの性質と解釈の実際について解説します。その他、流行の歴史データにも言及しています。本気で社会調査を行うためには、「社会調査論及び実習」のような科目を履修する必要があります。こればかりは実際にやってみないとわかりません。

以上、使用教科書の解説をしました。このテキストは本来放送大学教材でしたが、放送終了後も全国の大学で使われており、隠れたベストセラーです。よく読めば、社会学がわかった気にさせてくれます。しかし、本当に理解するためには、各章で取り上げている社会学の古典を読み込む必要があります。どれでもよいので、一冊でも紐解いてくださることを願っています。